

大学院博士課程体験記②

博士課程での学びを通じて得たもの

鈴木 佳代（すずき かよ）眼科学教室



私は北海道大学大学院医学研究科博士課程の基礎研究コースを履修しました。日々の診療を通して湧き上がった疑問と、それを解明したいという想いが、大学院での学びへと私を導いてくれました。ここではその体験の一端をご紹介します、これから大学院進学を考える方々にとって、何か参考になることがあれば幸いです。

私は眼科専門研修の一環として、北海道大学病院眼科に入局しました。後期研修医として経験を積む中で、ある一例の出会いが私の進路を大きく変えました。その患者さんは「飛蚊症」を自覚して来院され、私が初診を担当しました。しかし、当時まだ経験が浅かった私は異常所見を見つけられず、上級医に診察をお願いしました。すると網膜にごくわずかな色調変化が認められ、翌日、眼炎症疾患を専門とする医師による再診となりました。翌日の診察では病変が急速に進行し、私の目にも明らかな滲出斑が確認できました。最終的に本症例は、ヘルペスウイルスによる「急性進行性網膜外層壊死」と診断されました。失明のリスクも高い病態ですが、多職種の協力のもと視機能を守ることができ、診断と治療の迅速さ、そして連携の重要性を深く実感する経験となりました。

この経験から、私は眼炎症性疾患を専門とすることを志しました。臨床指導医育成プログラムのぶどう膜炎コースの履修を希望しましたが、人員配置の都合から希望は叶いませんでした。そんな中でも、私の志を尊重し、ぶどう膜炎に関する臨床研究に携わる機会を与えてくださった指導医の先生方の配慮に、今でも感謝しています。

研究に携わる中で、「専門的に学びたいのであれば、博士課程の履修が望ましい」との助言を受け、私は博士課程へ進学する決意を固めました。正直なところ、当初は研究に強い情熱があったわけではありません。「研究者になりたい!」というよりも、「もっとよい医療を提供したい」「もっと理解を深めたい」という臨床的な動機が先にありました。

私が所属したのは眼炎症免疫研究グループで、ぶどう

膜炎の新たな治療標的に関する研究を担当しました。思うように進まず失敗の連続で、研究生活は決して順風満帆ではありませんでした。動物実験の途中でモデルが死んでしまい、途方に暮れていたときに駆けつけてくれた先輩、挫けそうな時に何度も話を聞き励ましてくれた研究仲間や先生方がいて、私は最後まで研究をやり遂げることができました。研究とは孤独な作業に見えがちですが、仲間と支え合ってこそ前に進めるものだ実感しました。

産休を挟んだため3ヶ月ほど卒業は遅れましたが、無事に博士号を取得することができました。研究成果をご評価いただき、日本眼炎症学会学術奨励賞をいただけたことも、私にとって大きな励みとなりました。博士課程を修了した今、私は念願であったぶどう膜炎の臨床指導医育成プログラムに進み、日々臨床の中で学びを深めています。

大学院での学びは、決して「楽しいこと」ばかりではありませんでした。しかし、困難を乗り越えた先に得られた知識と経験、そして支えてくれる人々の存在は、今の私にとってかけがえのない財産です。これから進学を考える皆さんには、迷いがあっても一歩踏み出す勇気を持ってほしいと思います。大学院は、自分を深く見つめ直し、新たな可能性に出会える場でもあると、私は確信しています。



日本眼炎症学会学術奨励賞授賞式にて